

三津江金型株式会社



企業紹介

三津江 愿一郎*

1. 企業の概要

名称 三津江金型株式会社
 創 業 大正5年1月1日
 設 立 昭和24年7月25日
 資 本 金 4,500万円（払込済）
 代 表 者 取締役社長 三津江愿一郎
 従 業 員 130名 保有工作機械 130台
 売 上 高 15億円
 事業内容

ブラウン管，耐熱硝子製の家電用器具，工業用製品の部品，クリスタルガラス，ソーダガラス製の家庭用，建築用，食器用の鉢，コップ，皿等の容器類の金型の設計と製造。家電用，建築資材用，OA事務機器用の合成樹脂製品を作るための射出成型用金型の設計と製作。

上記の硝子用，合成樹脂用金型の成型作業に関連した機械，器具，装置の設計と製作。

所在地

本 社 大阪市旭区新森2丁目24番24号
 大阪工場 大阪府東大阪市今米336番地
 美濃山工場
 滋賀県東浅井郡湖北町大字美濃山
 五個荘工場
 滋賀県神崎郡五個荘町大字五位田

2. 会社の沿革

当社は，大正5年1月1日，三津江友吉が，硝子製造用金型の設計，製作を目的として，三

津江金型製作所の名で，大阪市大淀区长柄の地で，創業した。当時は硝子の化粧瓶，牛乳瓶を作る金型が中心であり，半人工及び手吹きと云われる成型方式の金型を製造した。

金型の材質は，チル化した普通鑄鉄が使用された。

昭和18年に，大阪府下の同業者と合併し，航空機部品と食器用の硝子金型を製造することを主要目的とする統合会社を設立した。その社名は，大阪機械金型株式会社，この従業員数は，250名であった。

昭和23年1月，終戦を期に，上記の会社を退き，現在の本社の場所に，三津江金型製作所を再開した。この時の製品は，押型式の硝子器製造用金型が主流をなし，吹込式，即ちブロー成型方式の製瓶用金型は，殆ど姿を消したのが戦前と較べて大きな相違である。

昭和26年に三津江金型株式会社に改組した。昭和33年より，今までのソーダガラス，或は屈折率の大きい，外観の肌のよいセミクリスタルガラスから，一層充分な表面の光沢のよい，更に屈折率の大きいクリスタル，ガラスで成型される押型式クリスタルガラスの金型の製造を始めた。

昭和36年より強度，耐熱性に優れた耐熱ガラス食器を製造する押型式ガラス金型の製造を始めた。この場合には成型作業中の金型の表面状況を常に清浄に保ち，更に製品の形状を正確に保つための歪の少ない材質の安定的な確保が重要であった。

昭和40年よりブラウン管用の金型の製造を始めたが，今までの金型に比し，精度の保証について，一桁の向上を常に確保することが，義務づけられた。従来の工作機械を使って切削し、

*三津江愿一郎(Genichiro MITSUE)，三津江金型株式会社，取締役社長，大阪大学工学部S22年卒機械工学科水力実験室粒体力学

後は、熟練技能者の手作業の製作手順の中へ、新しく放電加工機による作業方式が入って来た。更にフライスの直線送り加工方式へ倣い作業を含めた三次元的な曲面作業の機械加工方式が導入された。

併せて、NC方式によるフライス加工、旋盤加工も、この時から当社の金型加工の精度の向上と原価の確保、納期の安定へ大きく寄与した。

昭和52年より金型の成型品の多様化に備えて射出方式の合成樹脂金型の製造を始めた。

昭和53年より、現在の本社工場の能力を拡げるため、大阪府守口市南寺方に、分工場を新設し、ブラウン管用金型の製造ラインを設置した。

昭和58年に、上記分工場が作業量増大のため、狭くなったので、大阪府東大阪市今米に、大阪工場を新設し、上記の分工場を廃止した。

昭和61年に、得意先のブラウン管用硝子金型への納期、品質、原価の改善のために、滋賀県において、美濃山工場と五個荘工場の新設を実施した。

以上の結果、当社の金型は、本社、大阪、美濃山、五個荘の四工場で分散して、ユーザーの目的に合せた性能を備えた金型を、最適の時機に出荷出来る人、設備の配置を実施した。

今や金型製造の立場から見ると、日本は世界の中で、最も優れた人材を持ち、金型を必要とするユーザーの極めて強固な支援を受けて、その製造する金型は、品質、価格、納期について世界のトップグループにあることは、自他共に認める所である。当社も、この世界における金型大国となった日本において、同業者の激しい生存競争の中で、より強く、たくましく成長したことを感謝する次第である。

3. 企業の特徴

金型製造業界は、高付加価値と高度技術の両方を実現しつつある家電、精密、自動車、等の業界に対して、その中心をなす開発製品を、企画階段から、量産化へ移行するに当り、密接に協力して活動をする業界である。別の言葉で言うならば、日本の今後の発展を推進する先端企業の根源部門を支える基幹産業でもある。

この意味で、日本の金型産業の発展は、高度

経済成長としての実りを口にし、美酒に酔うだけでは、今後の脱落は明らかである。円高による米国の底力、発展への若さに溢れる韓国、台湾を始めとする競走相手の実績は周知の事実である。

戦後40年余りの我国の金型技術、経営の両面における努力は、やっと先進国と云われる欧米と較べ、金型の性能につき、品質、価格、納期で、追いつき、引離しつつある。然し、今後の努力を省き、一層の向上を、達成出来ないならば、衰亡、敗残の憂き目を見ることは、明らかである。

この金型業界は業種別に分けると、プレス型、プラ型、ダイカスト型、ゴム型、鍛造型、ガラス型、鋳造型、粉末冶金型と大別される。これ等は、その金型から作られる製品内容により区分して、金型の生産金額も、我国では大体この順になっている。

当社が得意として製造して来たのは、この中で、ガラス型、プラ型である。

就中、ガラス型では、押型式、プレス方式の硝子器成型用金型の設計と製造についての実績を活かして次の産業用、家電用、食卓用、建築用等の硝子用器具、部品類を市場に提供して来た。具体的には次の通り。即ち、ソーダ硝子、耐熱、耐衝撃の強化硝子製の瓶、容器類、各種の鉢、皿、コップ等。

光の反射、屈折率の大きなクリスタル或は、セミクリスタル硝子製の食器類。

情報産業の中心を構成するブラウン管の素材としての硝子器具類、等である。

これらの製品はその品質上の性能も重要であるが、これらの金型は、他の大きな製造装置の一部として求められる条件を残らず実現する必要がある。即ち目的とする製品を、限りなく、好条件で実現する能力を備えなければならない。

金型企業として当社は、この金型による必要条件を自由に実現する能力を総合的に備えることにその全力を集中している。

それは、人、物、金、時、空間の財を如何に活用するかにある。今や、技術的には、ハード、ソフト両面について目を見張る進歩があるが、その持てる力は、使用する人の活動を通して、金型として発揮出来る性能は、同じ時間と物、

金をかけても、それらを使って金型として組上げるまでの人間集団の努力とその結果が、決定的な条件となる。

即ち、如何に物量を備え、投入しても、無いよりはましであるが、結果としてよい金型は出来ない。真に役に立つ金型は、真剣な人間関係の組合せ活動の中に出来上ったチームワークと技術者としての良心を常に追究する姿勢の中に、必要な物量を時の条件を含めて、練り上げる所に、性能を保證した金型が完成される。

この金型を常に保證することに、“当社の存在価値あり”，と考えている。

4. 結 言

光り輝くガラスの七色，
永遠に変わらない安定した，清らかな素材，
これ等に代表されるガラスの平和と未来志向の印象を，当社の金型に活かしたい。

更に軽くて，丈夫で，使い易く，親しみ易い新素材としての合成樹脂の特色を活かした，高機能商品を保證した金型を当社から作り出し，そして，この金型から作られた家電，自動車，情報，工業関係の製品が，世界の一員として，平和で幸せな社会を我々の前途に展開出来るために，我々は一層の努力を続ける。

そして，近い将来には，我々の企業に関係する集団に対して，実り多い成果が充分期待出来ることを信じて精進を続けよう。 (以上)

